



平成27年度 鶴見大学先制医療研究センター主催・總持寺共催 シンポジウム 日本人の命のあり方 ～生と死を巡って～ 臨床宗教師育成事業 -傾聴と受容を学ぶ-

シンポジウム

平成28年3月12日(土) 午後1時～4時

「日本人のいのち観」

知識と技術のグローバル化の中で人間の身体と生命についての認識も単一性が高まっている。しかし、いのち観には社会文化的環境および歴史的要素が大きく関わるため、多様である。日本人のいのち観はその事をよく示している。

シンポジスト

波平 恵美子先生

1942年生まれ。文化人類学者、お茶の水女子大学名誉教授、日本民族学会(現・日本文化人類学会)第19期会長

「日本人の考える生死」

日本人は生死を歴史的にどのように捉えてきたのだろうか。仏教は生存の繰り返しを説いたが、日本人はそれを独自に理解して、独特の死生観を形成したように思う。とくに院政期以降の時代は、臨終の行儀を中心に独自の死後観を持った。生と死とをどのように捉えたのか、古代、中世、近世と、仏教と関わりのある、それぞれの時代の幾つかの資料を題材に、日本人の生死に関するとらえ方を考察してみたい。

シンポジスト

蓑輪 顕量先生

1960年生まれ。僧侶、東京大学人文社会科学系研究科教授、専門は日本の仏教、仏教思想史

「いのちの根源と目標」

137億年前、宇宙が誕生し、やがて人類が成立した。なぜ宇宙が存在し、そして人間が存在しているのか。不思議の極みである。そして釈尊が誕生した。それは宇宙論的出来事である。そしてその宇宙が仏身(法界身)であることに気づかれてゆく。人間は各自死の経験は不可避であるが、なお此の世も死後もその如来に包まれながら、みずからの内なる如来を展開してゆく。「此世及後世、願仏常摂受」「(『勝鬘經』)にあって各自法種を展開してゆく。

シンポジスト

河波 昌先生

1930年生まれ。九州大学印度哲学科を経て、京都大学大学院宗教哲学博士課程修了(1960年)、東洋大学名誉教授

コーディネーター **木村 清孝先生**

1940年生まれ。仏教学者、僧侶、曹洞宗龍宝寺住職、東京大学名誉教授、鶴見大学名誉教授、仏教伝道協会理事



准胝観世音菩薩
(大本山總持寺所蔵)

後藤サヤカ監督作品「Buddhist 今を生きようとする人たち」上映会 平成28年2月10日(水) 18時から
本研修事業の一環として上映会を開催します。場所はシンポジウムと同じく鶴見大学会館地下ホール、入場無料、事前申し込みは不要です。なお、上映後に藤田一照老師(曹洞宗国際センター所長)のご講演もごさいます。

参加費：無料(事前申込み不要)

会場：〒230-0062 横浜市鶴見区豊岡町 3-18
鶴見大学会館 地下ホール
(鶴見駅西口下車 徒歩5分・京急鶴見駅下車 徒歩7分)

公共機関のご利用をお願いいたします。

お問合せ
・連絡先

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3
鶴見大学副学長・鶴見大学先制医療研究センター長 前田伸子
TEL: 045-574-8602 E-mail: maeda-n@tsurumi-u.ac.jp

